四季の移ろい 冬から春へ

文化のみち二葉館八周年祝祭

今年2月8日の「ふたばの日」は開館8周年でした。記念イベントでは、記念朗読公演「貞奴と花子物語」、記念講演「貞奴と貞照寺」など多彩な催しが行われました。記念公演では、名妓連のみなさんの華やかな舞や唄が披露され、来場者を魅了しました。

「名妓(めいぎ)連」・記念公演「伝統芸」

岡井隆の世界 ～現在、そしてこれから

名古屋市生まれで青年期まで東区主税町4丁目の借家で暮らし、旧制愛知一中(現・県立旭丘高校)卒の歌人・岡井隆氏の展示を2月27日(水)～3月31日(日)まで開催しました。関連企画として講演会や歌会も行いました。

岡井隆講演会「歌人にとってふるさと(故郷)とはなんだろう」 3月16日

3月9日 表彰短歌

「岡井隆の世界 ～現在、そしてこれから」開催期間中の3月9日(土)の午前中には随行講師の歌人・小塩卓哉氏とともに「岡井隆のふるさとを詠む歌会」が行われ、優秀作品は3月16日(土)の岡井隆講演会の折に表彰されました。

見事、名古屋市長賞に選ばれたのは、岡井氏の実家跡を作歌した名古屋市北区在住の若尾幸子さんの短歌でした。ここでご紹介します。

廻(めぐ)り来し主税町界隈抜けむとし
ふり向けば昔、少年立てり

文化のみち 逍遥 その九

【旧春田鉄次郎邸】 名古屋市東区主税町三丁目6番地の2

文化のみちの主税町筋、旧豊田佐助邸の隣に落ち着いた黒門の建物があります。旧春田鉄次郎邸です。

この家を建てた春田鉄次郎は、明治元年(1868)、現在の多治見市に、農家の次男として生まれました。多くの困難を乗り越え、陶磁器貿易商として中部日本における対米貿易のパイオニアといわれ、陶磁器貿易発展に寄与しました。

陶磁器貿易商として成功し事業に邁進するかたわら、建築にも趣味があった鉄次郎は、ドイツ人、アメリカ人、武田五一などの建築家と交流を深め、数十棟に及ぶビル、店舗、住宅を築造し、大正13年(1924)にこの家を建てました。

アールヌーボーの余韻が漂う洋風数寄屋普請の建物は、武田五一の設計といわれ、洋館と奥にある和館から構成されています。

洋館玄関横にある待合(人力車の車夫の供待)は欧米風。床のタイルは80年たっても歪むことなく、当時の職人の技術の高さがうかがえます。また、もみじの透かしが美しい欄間、面取りのガラスなど、細部にも鉄次郎のこだわりが感じられます。

一方、和館も楓の一枚板を使った琵琶台、朽ち木を利用した欄間など、洗練された意匠を見る事ができます。

また、かつて旧春田鉄次郎邸に隣接する敷地にあった春田文化住宅も、武田五一の設計といわれ、広場を囲む13戸の集合住宅からなり、東南角には、鉄次郎の会社事務所、太洋商工の建物がありました。

旧春田鉄次郎邸は、景観重要建造物・町並み保存地区の伝統的建造物に指定されています。

現在は、洋館1階がレストランとして、和館の一部が事務所として活用されており、和館の一部と洋館2階は見学可能です。

古き良き時代の面影が残る、この建物を訪れてみませんか。

ありし日の大洋商工事務所

DATA 旧春田鉄次郎邸

- ■名古屋市東区主税町3丁目6番地の2
- ■開館時間　午前10時～午後3時30分
- ■入館無料
- ■問い合わせ　052-972-2780（名古屋市住宅都市局歴史まちづくり推進室）

※9月5日(木)以降に見学をご希望の方は、隣接する旧豊田佐助邸の係員にお声をお掛けください。

大正モダニズム建築の粋を見る ❼

貞奴と「もみじ」

貞奴には、関係する三つの紋があります。

一つは川上家の家紋の「九枚笹(くまいざさ)」、一つは福沢家の家紋「抱き割楓(だきわりかえで)」、そしてもう一つ、紋というよりマークと言った方が適しているかもしれませんが、調度や食器などに貞奴が用いた紋様です。

川面にもみじ(楓の葉)があしらわれた、シンプルでありながらエレガントなデザインの、名付けるとすれば「竜田川紅葉」と言ったところでしょうか。

紅葉(もみじ)とは文字通り「紅い葉」と書き、色を付ければ紅色という感じですが、現在では、一般的に赤く色づいた楓をイメージされることが多いのではないでしょうか。また、葉の色に関係なく、楓の別称にもなっているようです。

この「もみじ」という言葉ですが、古語の「もみつ」という言葉が変化したもので、「もみつ」とは、秋になり植物が紅葉する様を指している動詞という事になるそうです。

今でも「紅葉(こうよう)する」といわれると、秋になって植物の葉の色が赤や黄色に移り変わっていくことを指しますね。

川に流れる楓のデザインを、貞奴がどのように見たっていたのだろうかと思いをはせてみますと、福沢家の紋の「楓」を貞奴が自身のマークに取り入れたのか、それとも純粋に楓が好きだったからなのか、あるいは両方か…など、貞奴の思いについて今となっては知るすべもありませんが、貞奴が紅葉(もみじ)＝楓を好んだ背景には、川の流れに漂う楓の葉に、そして季節によって移り替わる楓の色に、自身の波乱にとんだ生涯を重ねる思いがあったのかもしれません。

二葉館では、照明のかさや食器にあしらわれた「竜田川紅葉」の紋様をご覧いただけます。また、2階には「竜田川」というタイトルで、ステンドグラスのデザインにも川と紅葉がモチーフとして施されています。

二葉館で暮らした在りし日の貞奴の生活に触れながら、この「竜田川紅葉」を探してみてはいかがでしょうか。

書庫棟から

文化のみち二葉館には、赤い瓦葺き屋根が印象的な和洋折衷の建物(復元棟)とは別に、書庫棟と呼ばれる建物が敷地内にあります。

書庫棟は二葉館開館にあわせて造られた鉄筋コンクリートの建物で、中には郷土ゆかりの文学資料が約6万点収められています。中心は平成19年に亡くなられた直木賞作家・城山三郎が生前、故郷の名古屋市に寄贈した約3万点もの蔵書・資料です。次に多いのが平成16年に亡くなられた歌人・春日井建で約1万7千点に及び、他に、戦後初の芥川賞作家・小谷剛や田村俊子賞の江夏美好、児童文学作家・しかたしんなどバラエティに富んでいます。

その方々の文学業績である図書・資料は大事に書庫棟で整理・保存され、閲覧は出来ません（調査・研究の場合はご相談ください）が、その一部は、二葉館2階フロアの郷土ゆかりの文学資料室でご覧いただくことができます。

展示室6は城山三郎の常設コーナーで、昭和55年に著した『男子の本懐』の頃の書斎が復元されています。

その何気ない普通の机と椅子は、気骨の作家・城山三郎さんの風貌を表しているようです。

展示室5は、春日井建、小谷剛、江夏美好に加えて坪内逍遙の資料や展示パネルが常設されています。坪内逍遙は現在の岐阜県美濃加茂市生まれで少年時代を名古屋で過ごし、この地とゆかりがあるからです。

展示室7には、同人誌活動が盛んな中部地方を反映して多数の同人誌が書棚に並んでいます。因みに城山三郎は「くれとす」、小谷剛は「作家」、江夏美好は「東海文学」とそれぞれ同人誌と深く関わっていました。

二葉館2階では「新美南吉の世界をたずねて」展のような企画展示も度々行います。ぜひ、郷土ゆかりの文学を味わってみてください。いろいろな発見がありますよ。